

國學院大學學術情報リポジトリ

国際研究フォーラム「見られることで何が変わるのか：ツーリズムと宗教文化 To Be Seen: Changes Through Interaction Between Tourism and Religious Culture」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001558

国際研究フォーラム「見られることで何が変わるのか—ツーリズムと宗教文化 To Be Seen: Changes Through Interaction Between Tourism and Religious Culture」

2023年12月17日に、日本文化研究所主催の国際研究フォーラム「見られることで何が変わるのか—ツーリズムと宗教文化」を開催したので報告する。

以下が企画の趣旨文である：

宗教とツーリズムは、グローバル化とあいまって、より一層相互に密接に関わるようになり、宗教文化を資源としてツーリズムを振興しようとする試みは、もはや珍しいものではない。それでは、宗教とツーリズムの交錯によって、どのような変化が生じているのだろうか。

宗教は、それが行われる場において、物体としてのモノや、実践としてのコトを伴うため、そもそも「見られる」ものであることになるが、誰もがスマートフォンを用いて日常的に写真や動画を撮り、かつ即座に発信することが可能になったという現代的な状況において、そのように「見られる」宗教は、どのように変容するのか。あるいは何を見せているのか。他方、それを「見る」人々の側も、見ることを通して何らかに変化しているだろうか。

これは、現代社会における宗教の問題であり、必ずしも日本の宗教文化に限定された話ではない。本フォーラムでは、様々な現場で調査・研究を行っている研究者に、宗教とツーリズムの多様な交錯のあり方について報告してもらい、議論を深めたい。

フォーラムの概要は以下の通りである：
「見られることで何が変わるのか—ツーリズムと宗教文化」

・日時：2023年12月17日（日）13:00～17:30

・場所：國學院大學渋谷キャンパス120周年記念2号館1階・2101教室

・報告者と題目：

- (1) 石本東生（國學院大學教授）「「ギリシャ」：神話とキリスト教の舞台そして観光—文化遺産を活かす共存—」
- (2) 沈昭良（写真家、華梵大学教授）「写真と社会風景—『STAGE』『Singers & Stages』『台湾綜芸団』を例に—」
- (3) 加藤久子（大和大学教授）「共生の物語をつむぎなおす—ポーランドに出現した2.5次元のユダヤ人街—」
- (4) ケイレブ・カーター（九州大学准教授）「自分を取り戻す／山里を取り戻す—修験道とツーリズムの交錯—」

・コメンテーター

山中弘（筑波大学名誉教授、日本文化研究所客員教授）

・司会

平藤喜久子（國學院大學教授、日本文化研究所所長）

続いて、各報告の要旨を掲げる：

報告（1）石本東生 「「ギリシャ」：神話とキリスト教の舞台そして観光—文化遺産を活かす共存—」

今回は、南欧ギリシャの観光地において「見られる」ことを通して、地域の文化遺産を再生し、且つ共存する事例を2件ご紹介したい。

ギリシャは15世紀半ばから19世紀前半までオスマン・トルコの支配を受けていた。その間、19世紀初頭、駐トルコ英国大使であったエルギン伯爵は、オスマン・トルコよりパルテノン神殿の彫刻大理石の傑作をただ同然で買い取り、大英博物館に寄贈。今や大英博物館最重要コレクションの一つとなっている。しかし、

近代ギリシャの建国以降、とりわけ英国に対して絶えずパルテノン大理石返還の要求がなされてきたが、20世紀後半には文化相も務めた女優メリナ・メルクーリを先頭に、これらの貴重文化財の返還運動が最高潮に達した。

そのような中、2009年6月、アクロポリスの南麓に新たな「アクロポリス博物館」が竣工、オープンした。その基礎部分には新石器時代終期（BC3千年頃）からAD6世紀頃に至る様々な時代の住居群、道路、貯水槽が発見され、グランドフロアに敷かれた強化ガラスの下では、それらの遺跡群を観覧できる。同博物館のコンセプトは2千4百年前の「アクロポリスの参道を辿るような設計」であり、高い真正性を顕示しつつ、パルテノン大理石の帰還を待ち望んでいる。

一方、世界的にも屈指のアイランド・リゾートとして知られるエーゲ海キクラデス諸島のサントリーニ島は、古来、地中海海上交通の要衝であり、中世期には船舶従事者が数多く居住していた。また、キリスト教は既に6世紀には伝播していた記録がある。そのような中、海難事故から奇跡的に救われた船員たちは、感謝をこめて「神に見られるように」教会堂を建立した。よって、現在、同島内には352もの教会堂が存在するが、その殆どが「私有」である。

その後、20世紀に入り、船舶の技術革新によって、サントリーニは地中海の海上交通の要衝という役目を終え、極度の過疎化に直面し、町は廃墟となった。しかし1976年以降、ギリシャ観光省の再生事業により島内イア地区の伝統的集落が甦ったことを機に、島の各集落の観光地化が一気に加速した。荒れ廃れていた各地の教会堂も今や美しく再生し、「神にも人々にも見られる」スポットに生まれ変わっている。

報告(2) 沈昭良「写真と社会風景—『STAGE』『Singers & Stages』『台湾綜芸団』を例に—」

台湾には、綜芸団、歌舞団、康楽隊、そして視覚映像メディア会社などの名で呼ばれる

さまざまな演芸興行団体がある。いずれも仕事内容と客層は重複しており、まとめて台湾独特の移動式興行団体と呼ぶことができる。これら諸団体は、1970年代前後から、歌やダンスなどのパフォーマンスを中心に、台湾社会の冠婚葬祭の場において活躍してきた。私が写真を撮影してきたステージカーは、今でも現役で、台湾庶民社会に生き続けている。ステージカーは、上記のような興行団体の公演の場となる「キャリアー」であると同時に、多くの台湾民衆の集合的な記憶の「キャリアー」にもなっているのである。

2005年の暮れの頃だったのだろうか。私は「台湾綜芸団」を主とする撮影プロジェクトに集中して取り組むために、ちょうどフィールドワークを始め、台湾の総合演芸団が公演を行う「キャリアー」としてのステージカーに、何度も遭遇した。静寂の農村で、ナイトマーケットの喧噪の傍らで、辺境の漁村で、道ばたの雑踏の中で、はたまた寺のざわめく広間の前で。まるで巨大な台湾版トランスフォーマーのようなこのステージカーに、惹かれる自分がいた。描かれた台湾らしい色彩とテーマ、それらが結びつける生産の知恵と発想、そこに表現された庶民の価値観と記憶、その土地の精神性や気質がもたらす影響の深さと広がり、そこから拡張される文化の厚みと広がり。そういったものに、絶え間なく心を動かされ、私は次第に『STAGE』（ステージカー）、『Singers & Stages』（歌手とステージカー）、『台湾綜芸団』を、それぞれ独立した作品テーマとして発展させたいと考えるようになった。

ステージカー上で行われる公演の内容は、初期には歌って踊るパフォーマンスが主なものであった。その頃の芸人たちの衣装や表現様式は、どちらかというと、屋内で行われるショーの華麗な服装と似通っていた。近年では、セパレート式の衣装が主流であり、中にビキニを着るスタイルが一般的となってい

る。演芸興行団の公演内容も、派手で顧客のニーズを満足させるものであり、絶えず新しい演目が追加される。タレントや歌手による歌と踊りのほか、依頼主の予算に合わせて、ポールダンスやアクロバット、手品、民俗芸能、ボディービル・ショー、芸人が異性に扮するショー、そしてビッグバンドによる演奏などが加わるのである。

今回の報告は、2006年から2016年にかけて撮影した『STAGE』、『Singers & Stages』、『台湾綜芸団』の三つの作品シリーズから、美学表現、歴史、文化、宗教などとの繋がりにもとづいて写真を選び、全体像が見えるように編集したものである。この産業の独特さ、そこに含まれる豊かな文化的情報、駆け巡るアイデア、まばゆく華麗なトータル……。これらは大衆に働きかけ、独特な産業であり娯楽文化であるものに、時間的な広がりを持たせ、かつ空間的な、つまり縦、横、平面、及び立体的な枠組みを織り込み、人々の想像を促している。撮影に際しては、ほとんど伝統的とも言える直接的な撮影方法を用いることによって現代的な芸術語彙を混ぜ込み、台湾のいまを伝える社会文化の景況に焦点を合わせて、これを視覚的に描写することを試みた。報告では、実際に撮影した写真に触れながら、あらためて振り返りたい。

報告（3）加藤久子（大和大学教授）「共生の物語をつむぎなおすーポーランドに出現した2.5次元のユダヤ人街ー」

ポーランドには13世紀頃から、西欧で迫害を受けたユダヤ人が移住するようになり、商業で栄えた大都市にはユダヤ人が集住する通りや地区ができるようになった。彼らは自治を行ない、教育や出版などを通じて独自の宗教文化を開花させた。第二次世界大戦前にはポーランド人口の10%（都市人口の25%）をユダヤ人が占めていたとされる。しかし、ナチス・ドイツのポーランド侵攻とその絶滅政策を機に、ポーランドのユダヤ人コミュニ

ティは壊滅的な被害を受けた。さらに1967年の第三次中東戦争に際し、ポーランドはイスラエルと断交し、ユダヤ人の公職追放なども行なわれたことから、その多くは国外移住を決断し、ポーランドのユダヤ人コミュニティは崩壊したとされる。

1989年の民主化以降、ユダヤ人住民のほばいなくなったポーランドで、ユダヤ人街の「再建」が進められてきた。南部の都市クラクフにあるカジミエシュ地区は、映画「シンドラーのリスト」のロケが行われたことから、フィルムツーリズムの対象となった。シナゴーグが復元され、それぞれ特徴ある博物館として公開されており、通りには時代がかった看板を掲げる店舗が軒を連ねる。しかし、それは街全体の再建ではなく、映画の1シーンのように精巧に作りこまれた細部がオリジナルの街並みに埋め込まれているような印象も与える。

実は、ユダヤ人街という触れ込みで観光客をひきつけるこの場所はカトリックの聖地でもあり、ゴシック様式の巨大な教会や修道院が並び、カトリックのポーランド人が代々暮らしてきた場所なのだが、その威容は観光客の目に入らないようである。

報告では、映画のイメージを探す観光客のまなざしが「ユダヤ文化」を顕在化させていることに焦点を当て、ユダヤ人住民の「不在」の中で復元される「ユダヤ文化」の持つ意味について考えたい。

報告（4）ケイレブ・カーター「自分を取り戻す／山里を取り戻すー修験道とツーリズムの交錯」

日本における山岳信仰の一形態である修験道は、厳しい修行として生まれたが、江戸時代には巡礼や民間信仰を通じて広く普及した。近代の一部では禁止されていたが、近年、地域の観光開発とともに広まりつつある。本発表では、修験道と観光が過去と現在をお互いにどのように関わってきたかを考察する。

江戸時代にあった参拝と現在の三つの事例を挙げる。

本発表は、物質性や経済性から切り離された従来の宗教観に疑問を投げかけることから始まる。プロテスタント的で近代的な宗教観を乗り越えることで、宗教と観光のつながりを分析することができる。観光は純粋に世俗的な活動であり、巡礼は厳密に宗教的なものであるという考え方は、多くの場合、現れない。どちらか一方に当てはまるケースもあるが、どちらか一方のカテゴリーを理解する方がよい。その点、多くの旅行形態と宗教的实践は中間に位置する。

レジャー旅行の一形態としての観光は、そのほとんどが近代の世界と結びついているが、最初の事例として、巡礼と観光が近世において並行して発展したことを示す。特に、長野県に位置する戸隠山に関する近世登拝を例に挙げる。そして、現代日本に視点を移し、修験道と観光の接点について三つの例を紹介する。第一に、戸隠山をはじめとする霊山を定期的に訪れる、東京を拠点とする修験的な講について考える。修験者の指導の下、参加者は主に法螺貝の稽古を受けている。旅は週末に行われることが多く、戸隠周辺の聖地を訪れて神々と交わることが中心だが、参加者は普段の生活から離れ、美しい環境の中でリラックスすることもできる。第二に、金峯山と熊野周辺の外国人観光客に修験道的なコースを案内している女性外国人修行者を紹介する。この様な旅行は、参加者がオルタナティブ的な自己修養の形を見つけるために世界中を旅する、より広範なグローバル・スピリチュアル・ツーリズムのパターンを例証している。第三に、日本におけるハイキングの多目的プラットフォームとして設計されたアプリベースの会社、YAMAPの例を挙げる。同社は、登山のための強力なロジスティック・ツールを提供する一方で、ユーザー同士が共有するバーチャル・コミュニティの創造を目指して

いる。創業者が率いるこのミッションの一部は、修験道とハイキングのつながりを強調し、修験道のコースを共同で行うことである。

以上の4報告を受けて、山中弘氏からコメントを得た。

山中氏は、ツーリズム研究において「まなざし」が問題化されていることに触れた上で、本フォーラムは特にツーリズムと宗教文化の関係に焦点を合わせて「見られる」ことを論じている点で興味深いとした。宗教文化において、本来は“不可視”とされる宗教的なものがある一方で、実際にはそれが「モノ」を介して可視化され、かつそれがツーリズムと結びつくことがある。報告者達は「神殿」「舞台車」「街並」「山」などといったモノの具体例を取り上げて論じており、宗教文化とツーリズムを論じることの意義と可能性を感じたと述べ、続けて個々の報告の意義・面白さをまとめた上で質問を投げかけた。

紙幅の関係上、個々の質問と報告者達からの応答については省略するが、その後のフロアとの充実した質疑応答を含めて、論点として「見せようとするものの真正性」、あるいは「見る側が受け止める真正性」といったことが問題となり、これと関連して、見えるようにすることで、逆に見えなくなるものがあるのではないかといったことが論じられた。また、これも真正性と関係する論点であるが、見る・見られるといったことを問題とする場合に、何を見せようとしているのか、という意図の問題も取り上げられ、見せようとするものが現実の景観にも影響を与えることが議論された。もう一点、継承と変容について、伝統的な修験の山において近年見られる復興の動きは、講の衰退と並行して生じており、そのように見るならば近世以来の修験とどのように連続し、断絶しているのかという点も論じられた。なお、本フォーラムには延べ64名が参加した。(星野靖二・武井謙悟)